

「工芸」英訳ガイドライン

工芸を伝える際に、気をつけたいポイント

心構え・基礎編

その訳語、
伝わって
いません!



目次

はじめに

このガイドラインについて

本ガイドラインの対象者

第 1 章 海外から見た日本の工芸英訳 1

- 1 ロンドンで100人にきいてきました
この訳語、伝わっていますか? 2
 - 2 ロンドンで100人にきいてきました
訪日観光客の目線で産地を訪ねてみたら 3
 - 3 ロンドンで有識者にききました
国宝の茶碗にふさわしい訳語はどれか 6
 - 4 「伝わっていない」と認識しよう 8
- 参考資料 講演「日本の工芸と翻訳における課題」 9

第 2 章 工芸用語・英訳の基礎 13

- 1 産地の工芸品名の訳し方 14
 - 2 typeとstyleの考え方 18
 - 3 日本語と海外でその意味が異なって使われている言葉 20
- 参考資料 シンポジウム「工芸英訳のための共通ルールづくりに向けて」 22

第 3 章 表記のイロハ 27

- 1 英文の表記の基本 28
 - 2 日本にしかない独自の工芸の素材や技名はどう訳す? 32
- 参考資料 英語テキストの中の日本語(ローマ字表記)の扱い方 32
- 3 SWET (Society of Writers, Editors, and Translators) に学ぶ
使用するフォントとハイフンについての「6つのルール」 35
 - 4 SWET (Society of Writers, Editors, and Translators) に学ぶ
「すべて大文字」で表記の問題 38

第 4 章 和英翻訳の心構えと参考にしたいサイト 40

はじめに

近年、日本の工芸に国際的な注目が集まり始め、世界から人を運ぶ観光資源としての期待も寄せられるようになりました。しかし、興味を持った海外の人が工芸の世界をより深く知ろうとする時、そこには翻訳の壁が立ちほだかります。

工芸分野の言葉は、日本語を日常で使う人でも、実はその意味を理解しないで使っていることがよくあります。同じものを指すのに、地域や時代によって異なる呼び名になっていることも数多くあります。それらを自覚しないまま英訳者に原稿を渡してしまうと、さらにわかりにくい説明や間違った解釈が生まれることになります。

誤解が生じやすいものが何か、どこの部分をいねいに訳して伝えてもらいたいのかを、発注する側がしっかり認識しながら進めていきましょう。本書では、工芸分野の言葉を英訳する際に生まれる問題を検証します。

また、言語としての英語のルールを無視したケースもしばしば見かけます。ブランディングやデザインにどれほど心を砕いたものであっても、これではデザイン以前に失笑され、ブランディングどころではなくなってしまいます。アルファベットを使い始めた瞬間、日本語のルールではなく、英語表記のルールに則ることは必須条件なのです。

工芸の魅力を世界に発信するために、世界の工芸ファンがより深く工芸を知るために、わかりやすい英訳をつくっていきましょう。そのためのガイドとして、工芸作家や職人、販売者、通訳者、翻訳者のみならず、観光やビジネスなど、海外に向けたさまざまな場面で活用していただければ幸いです。

本ガイドラインの特徴

- ・日本の工芸を紹介していく際に必要な、基本的な言葉(工芸品名など)を集めました。
- ・大文字の使い方、スペースやハイフンの使い分けなど、基本の表記ルールを整理しています。
- ・参考になるサイト、英訳の発注に際しての心構えをまとめています。

このガイドラインについて

本ガイドラインのベースとなったシンポジウム

- ・「Japanese Crafts and the Challenge of Translation 工芸英訳ガイドライン」
- ・「Crafting Shared Understanding: Japanese-to-English Translation Guidelines for Craft 工芸英訳のための共通ルールづくりに向けて」

(いずれも2019年 於：ロンドン)

本ガイドラインが参考・引用した資料

- ・「*Japan Style Sheet, 3rd Edition*」(日本在住で英語を母語とするプロのライター、編集者、翻訳者が情報交換などの活動を行う団体SWET (Society of Writers, Editors, and Translators) によるスタイルマニュアル)
- ・「地域観光資源の英語解説文作成のためのライティング・スタイルマニュアル」(観光庁 2022年度版)

本ガイドラインの対象者

- ・工芸に関わる人
 - 美術館・博物館や伝統産業工芸館などの文化施設、工芸分野の販売・ビジネス、観光に携わる人、工芸のつくり手
- ・日本の工芸品の英語化に携わる人
 - 多言語化担当者、翻訳者、通訳・ガイドなど ※英語能力のある人
- ・日本の工芸に興味・関心のある英語圏の日本語話者
- ・日本語と英文を併記する、カタログ、ガイドブック、チラシ、Webサイトのデザイン・レイアウトを実際に行う人。その内容をチェックする担当者、編集者

第 1 章

海外から見た 日本の工芸英訳

Sometsuke-yaki
(stained pottery)



ロンドンで100人にきいてきました この訳語、伝わっていますか？

「染付」は有田焼、京焼、瀬戸焼をはじめ、古くから磁器のやきものの中心的な技法です。にもかかわらず訳語がバラバラで、それらを掲載している美術館・博物館・観光案内は、それぞれの訳語が正しいと考えて使用しているのが現状です。実際に使われている訳語で伝わるとするものにはYesのカード、避けたほうがよいと思うものにはNoのカードを掲げてもらいました。



		伝わっている	伝わっていない	○推奨 / ×非推奨
染付 (そめつけ)	underglaze cobalt-blue	21	5	○
	underglaze drawing	0	29	×
	underglaze blue	23	6	○
	cobalt blue paint under the white glaze	3	23	×
	blue and white	5	25	×
	blue-and-white	5	25	×
	sometsuke	15	14	
	sometsuke: blue & white underglaze painting	23	11	○
	sometsuke-style	1	32	×
	cobalt blue sometsuke	6	23	×
	sometsuke (underglaze blue)	23	11	○
	Sometsuke-yaki (stained pottery)	1	30	×
	sometsuke or underglaze cobalt-blue wares	20	15	
	underglaze blue (sometsuke)	24	7	○
	blue and white-glazed porcelain (sometsuke)	21	10	○
	underglaze blue (painting)	0	34	×
	underglaze cobalt blue	25	11	○
	underglaze blue design	4	28	×
underglaze blue decoration	7	26	×	
under-glazed blue pattern is called "sometsuke"	7	24	×	

YES, NOの結果を受けて、その場にいた識者の意見

「染付」という言葉は古く17世紀中頃の葡日辞書にも掲載されており、その頃からポルトガル人は「染付」という言葉を知っています

[井谷善恵 | 東京藝術大学グローバルサポートセンター 特任教授]

以前、誰かが図録か何かに書いていましたが、海外では99.9%の人が、sometsukeをどう発音してよいかわからないのだそうです

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

大変興味深いのは、満場一致となる言葉はほとんどなかったこと。なぜなら対象の皆さんはさまざまであって、日本人もいれば日本人ではない人もいます。とても示唆に富んでいました

[渡辺俊夫 | ロンドン芸術大学、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン教授、トランスナショナル・アート 研究所所長]

ロンドンで100人にきいてきました 訪日観光客の目線で産地を訪ねてみたら

海外の方にとって、工芸産地は、東京・大阪・京都とは全く別の、日本らしさの残る魅力的な場所です。現在は、英訳語を載せたガイドや案内板が日本各地でつくられています。佐賀県の協力の元に、有田焼で知られる有田町を、海外からの旅行客の目線で歩いたと想定した調査を行い、英訳語の案内を作成する際に注意したい点をまとめました。シンポジウム(▶p.43)に参加いただいた、日本文化に関心の高いロンドンの方々と検証しました。

1 訪日旅行客が困惑するポイントは？

注目されるローカルリズム。
「英語看板だらけにすればいい」というわけではありません。しかし「これだけは改善すべき」というポイントは？



有田の例

困惑ポイント1

訪問したい場所付近に行っても、アルファベット表記がない

英語の素晴らしいガイドマップはあっても、実際の施設の名称が仮名や漢字で書いてあっては目的地にたどりつけません。名刺サイズでよいので、建物の入口にアルファベット表記を掲げましょう。

※2017年に有田町中心部を調査した際は、メインの通りにある窯元やお店50軒のうちアルファベット表記を掲げていたのは10軒だけでした。

困惑ポイント2

美術館や工場の名称が、ガイドやマップや街の案内板と実際の表札で一致していない

施設名の英語表記は、個別に訳してしまうので統一されていないケースがあります。

※マップ上では“〇〇〇〇 porcelain Museum”なのに、実際の施設の看板には“〇〇〇〇 celamic Museum”となっていることがあります。

困惑ポイント3

ひとつの日本語に対して、多くの異なる訳語がある

「陶磁器」を指すのに、Porcelain, China, Ceramic, Earthenwareなど何種類もの訳語があり、それらが混在しているため、それぞれが別のものを指すのか同一のものであるのかわからず、混乱します。

※日本遺産に認定された肥前やきもの圏(有田町、唐津市、伊万里市、武雄市、嬉野市、平戸市、佐世保市、波佐見町)のように、少し移動すれば別の産地に行けるやきもの産地は国内に複数あります。それぞれの自治体が個別に英訳しているため、自治体ごとに訳語が異なってしまう、さらに混乱に拍車をかけています。

複数英訳例 — 産地で地図に出てくる言葉

		例
窯元 (やきもの工房)	kiln	Yamada Kiln
	gama	Minoru gama
	gama-kiln	Asada gama kiln
	Studio	Fujino Studio
	Pottery	Naoki Pottery
	Tobo	Nagashima Tobo

- “gama” “Tobo” は日本語をローマ字表記にただけで、意味が伝わることはありません。
- “studio” や “pottery” は、民藝作家のような、厚みのある陶器をつくる人たちを思い浮かべさせます。磁器をつくる窯元には不適切です。

複数英訳例—パンフレットやガイドマップに出てくる言葉

		例
窯跡 (かまあと)	kiln ruins	Tengudani Kiln Ruins (有田)
	ruins of ~kiln	Ruins of Tengudani Kiln (有田)
	Remains of ~ kiln	Remains of Tengudani Kiln (有田)
	~ -gama ruins	Hirosemukai-gama Ruins (有田)
	the old ~ kiln	
	~ kiln site	Tengudani Kiln Site
	site of ~ kiln	Site of Kakiemon Kiln (有田)
	site of the ~ kiln	Site of the Kishidake Kiln (唐津)
	site of ~ ware kiln	Site of Hizen Ware Kilns (唐津)
	site of ~ the ceramic kiln	
	ceramic kiln site	
	porcelain kiln site	
	old -gama kiln	Old Ochawangama Kiln (唐津)
	old ~ kiln	The Old Kishidake Klin (唐津)
	kiln remains	Nabeshima Kiln Remains (伊万里)

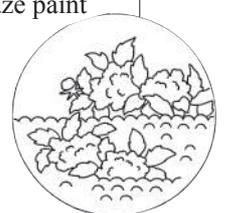
複数英訳例— 現地の案内ガイドに出てくる言葉

有田焼 (ありたやき)	Arita ware
	Arita porcelain
	Arita ceramics
	Arita pottery
	Arita ceramic
	Imari/Arita ware
	Aritayaki

ガイドブックやマップ、各窯元の英語サイトは、それぞれ個別に英訳を発注しているために、訳し上がってきたものがバラバラになっていることがほとんどです。話し合いをもち、統一に努めていきましょう。

複数英訳例— 美術館・展覧会の図録に出てくる言葉

染付 (そめつけ)	underglaze cobalt-blue	色絵 (いろえ)	overglaze polychrome enamel(s)
	underglaze drawing		overglaze enamel(s)
	underglaze blue		overglaze polychrome color(s)
	cobalt blue paint under the white glaze		overglaze polychrome
	blue and white		polychrome overglazed
	sometsuke		polychrome over-glazing
	sometsuke: blue & white underglaze painting		multicolored overglaze painting
	sometsuke-style		multicolored overglaze paint
	cobalt blue sometsuke		



困惑ポイント4

英訳自体の間違が多い

言葉の英訳に加え、Google Mapでも「窯元」が“Chinaware store (陶器店)”と誤解され表記されていることもある。修正できるものは依頼をしていきましょう。

2 「解決するには」何をしたらいいか

英語表記が地図上だけでなく、実際の場所にもあったほうがよいでしょうか。(※大英博物館やヴィクトリア&アルバート博物館(以下V&A博物館)のキュレーター、大学の研究者、大学生、美術家、作家など、やきものについて理解のある100人の方々にご協力いただきました)

Q1 できる限り全ての案内を英訳すべきだと思うか?

Yes 90% / No 10%

ちなみにNOの意見

英語化するだけが方法ではありません。他の方法もあるのではないのでしょうか。常に全ての建物に英語が書いてある必要はないですし、配布物などに番号をふったりして、旅行者が少し考える余地があってもいいと思います

地図上にたくさんの情報を詰め込むことをやめて、デザインで誘導する、言い換えれば重要なものを示唆するようなデザインになるとよいと思います

会場の意見

英語をあちこちにつけるとするのは、ある種の義務付けされた国際化のようであまり望ましくありません。全てが英語で書かれた有田を回りたいですか? スマートフォンを見ればどこにいるかわかるような形でもよいのではないのでしょうか

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

Q2 同一施設が複数種類の異なる訳語表現をしていることについて、統一すべきか?

Yes 87% / No 13%

ちなみにNOの意見

私は美術家として現地に行きましたが、porcelain (磁器) はceramics (やきもの) の一部なので、どちらも正解だと思います

その博物館は磁器だけか、それともほかのやきものもあるのか、陶器や土器も展示しているのかによるでしょう

圧倒的に磁器が多ければporcelain museum。しかし、展示されている作品の素材の違いと照らし合わせて名称を判断されているという点で興味深いです。陶磁器には磁器以外も含まれるが、有田は特に磁器が有名なので

[渡辺俊夫 | ロンドン芸術大学、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン教授、トランスナショナル・アート 研究所所長]

佐賀県でワークショップを行った時に出た意見

所在地・施設名・工芸品名は表記法・名称を統一する・・・地図上の名称と実際の看板／隣接する地域全体

外国人旅行者からの意見や要望を集約する窓口や手法を作る
改善に協力したい外国人は多いので、フィードバックする方法を今後考えていく

ロンドンで有識者にききました 国宝の茶碗にふさわしい訳語はどれか

国宝に指定された日本産の茶碗2点のうちのひとつ「卯花塙^{うのはながき}」は、展覧会のたびに英訳が異なっています。日本の顔でもあるこの茶碗の英訳は、何が適切でしょうか。

志野茶碗 銘「卯花塙」 その訳語は毎回異なっています

〈参考〉美術館・博物館の英訳例

卯花塙 (うのはながき)	Tea Bowl, Shino Style Known as “Unohanagaki”
	Shino type tea bowl known as “Unohanagaki”
	Tea Bowl Mino ware, Shino type Known as Unohanagaki (“deutzia shrubs”)
	Tea Bowl, Mino ware, Shino type Known as U no Hanagaki
	Tea bowl, Mino ware, Shino ware known by the name of U-no-hana-gaki
	Tea bowl, Shino ware named “Unohanagaki”
	Tea bowl in ‘Shino’ style, fence design named ‘Unohana-gaki (deutzia flowers in fence)’
	Tea bowl, Mino ware, shino type named “Unohanagaki”

上記はどれもベストではありません

「卯花塙」はこう訳す。

Tea bowl, named Unohanagaki, Mino ware, Shino type
茶碗, + 銘 (named) + 卯花塙, + 美濃焼, + 志野様式

銘についての推奨訳 ○called ○named

- ・広くその名で呼ばれるようになり、定着したという意味で“called”
- ・茶人や数奇者が特別な思いを込めて名付けたという意味で“named”

注意: なお、刀剣に刻まれた「銘」とは日本語の意味も異なるため、刀剣の銘については上記は該当しません

① 「銘」の扱い

「ローマ字表記は必要。でも意味まで記すのは難しい」

そもそも「銘」は、複数似たものがあるときに、どの茶碗かを判別するのに役立っています。

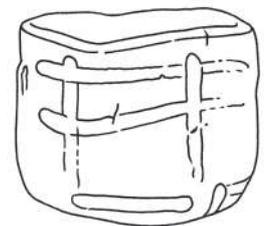
「銘」は人名と同じで、音としてローマ字で記す必要はありますが、その意味を訳す必要はないと思います

[西田宏子 | 根津美術館顧問]

「『銘』についての解釈の翻訳を、解説のほうには必ず入れるべき」

私は訳したほうがいいと思います。まずローマ字表記にします。そのうえで、持ち主がこの「卯花塙」という「銘」をつけた由来を中心に、25語から50語で解説するべきだと思います

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]



「迷うところです」

必ずしも簡単ではありません。詩的で想像力を刺激する茶道具に与えられる「銘」は翻訳が難しく、長い文を書くよりほかありません。銘に対する翻訳を、タイトル中につけたほうがよいのか、解説に譲ったほうがいいのか、判断に迷います

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「作品を理解するには必要な要素」

作品に固有の「銘」は、作品を理解するためには必要です。「卯花牆」の名前はすぐに特定できない樹木の名前に由来しています。私からみれば(作品名の)翻訳というより、解説の粋に入ります。何故この作品が作られ、何がこの作品を格別なものとし、その名前が指すのがどんな花や木なのか、こういったことは全て解説になります

[Tanya Szrajber | 大英博物館 データベースおよび単語の記録保存部門の前責任者]

② 志野の表記のしかた

第2章-2 (▶ p.19) を参照

③ 語順は?

「銘は“Tea bowl”のすぐあと」

すべての志野が「卯花牆」と呼ばれているのではなく、この茶碗にのみつけられた名前であるのならば、Tea bowlのすぐあとに、もってきたほうがよいでしょう

[Tanya Szrajber | 大英博物館 データベースおよび単語の記録保存部門の前責任者]

「茶碗→銘→美濃焼→志野様式」

Tea bowl, named *Unohanagaki*, Mino ware, Shino type

語順を重要事項から並べます。茶碗→銘→美濃焼→志野様式

→馴染みのないタイトルはイタリックが自然です

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「伝わっていない」と認識しよう

Joe Earle [ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

数十年見てきましたが、日本の翻訳の質は、美術館・博物館含め公的な機関においても、とりわけ美術工芸に関わる領域は、残念ながら「落胆するほど低レベルと言わざるをえない状況」です。

「伝わっていない英訳」はなぜおこるか？

日本の工芸英訳が惨憺たる状態である理由

1. 英訳に対する意識の低さ

- 英語を「知っている」と思い込む傾向があり、プロに助力を求めない
- 英訳を「コミュニケーションの手段」として徹底できていない。
国際化への姿勢を見せるポーズでしかなく、訳しただけで満足してしまう
- 「日本語バージョン」の英語が通用すると勘違いしている

以下のような状態を「放置」している日本の翻訳事情が原因

- ① 大文字や句読点の誤用
- ② 不自然な語順
- ③ 無頓着なスペルミス
- ④ 日本に定着したカタカナ語をローマ字化しただけのことばの混在
- ⑤ 翻訳していない表記

例) Nihon Taro

Born in Tokyo, 1973. Established NIHON TARO DESIGN, 1999.

Significant Works; AGRICULTUREHALL (2015, Miyazaki),

KENMINKAN (2017, Akita), TMPLE BOSO (2018, Chiba), GALLERY NI-NO-MIYA (2018, Tochigi),

INDUSTRIAL DESIGN IN SASEBO PORT AREA (on going project, Nagasaki)/

解決法1

プロに頼む

- ・英語が出来る人 (プロアマ含めて) に協力を求める
- ・しかるべき手数料を翻訳会社などに支払い、依頼する



プロ品質の英訳を作成し、正しく伝えることが大切

日本の工芸英訳が惨憺たる状態である理由

2. 慎重に検討したにもかかわらず、伝わらない訳語を採用する

例) ときめき	spark joy	直訳は「火花の喜び」であり、意味不明
和牛	wagyū	典型的な日本の「ブランド」として発信された直後、Wagyūの 意味を理解しないオーストラリアの多くの農家が Wagyū を販売しはじめた
和紙	Japanese washi paper	訳せば「日本の、日本の紙、紙」

解決法2

誰も知らないような造語や専門用語を使わない

「世界中の人たちのコミュニケーション」という、多角的なあるべき姿を目指す

※よく理解されている英単語を廃止してまで、印刷物や Web サイト、あるいは口述に登場するたびに説明が必要な別の単語に置き換えるのは不適切

解決法3

「何を伝えたいか」を忘れない

- ・言葉や分類の解釈に終始しない
- ・伝えたい気持ちと、伝えたい全体像を見失わない



英訳しながら、つねに何を伝えたいかの原点に立ち戻ることが大切

参考資料

日本の工芸と翻訳における課題

p.8～9は、2019年にロンドン大和日英基金で開催されたJoe Earle氏の講演をまとめたものです。こちらは、そのオリジナルの講演内容になります。

英訳の問題を解決するために重要なことは

- ・言葉としての明瞭さ
- ・一貫性
- ・コミュニケーション（伝わっているか）

の3点です。

確かに一般的な大きな組織ではかなり進歩が見られる一方で、むしろ後退したのではないかと思う部分もあります。

しかし、物事をもっと大きく捉えてみると、そこに見えるのは、全体像を曇らせている二つの誤解です。一つは不注意から生み出され、もう一つは積み重ねの結果によるものです。

日本の芸術、工芸、デザインにプロとして携わっている多くの人にとって、日本での英語表現の基準は、全体的に非常に低いままであることは明らかでしょう。

いくつかの例をご紹介します。

*これは先日ネットで見つけたものですが、表現の間違いや不自然さはそのまま、個人名や地名を架空のものにしました。

| Nihon Taro

Born in Tokyo, 1973. Established NIHON TARO DESIGN, 1999.

Significant Works; AGRICULTUREHALL (2015, Miyazaki), KENMINKAN (2017, Akita), TMPLE BOSO (2018, Chiba), GALLERY NI-NO-MIYA (2018, Tochigi), INDUSTRIAL DESIGN IN SASEBO PORT AREA (ongoing project, Nagasaki) /

これは、あるデザイン会社が作ったものですが、大文字と句読点の不合理な使用、不自然なレイアウト、外国語のスペルミス、誤った翻訳という意味では、ネット上で見られる代表的な例と言えるでしょう。(▶ p.8)

次も、匿名化された別の例です。ニューヨークのJapan Societyで作品を発表するオープンコールの機会ですが、次の展覧会歴をご覧ください。

Exhibited

- 1992 The 3th International Textile Competition'92-kyoto-
The Museum of Kyoto, Japan.
- 1994 Art of Present-day World "Textile Exhibition of Japan"
National Museum of Art, Osaka, Japan
- 2005 TRENNAL INTERNATIONAL TAPESTRY AND TEXTILE ARTS EXHIBITION
Fasinants *¹ textiles du japon (INVITATION)
Tounai *², Belgium.
TEXTILE 05 -KAUNAS ART BIENNIAL-
(INVITATION) Kaunas, Lithuania.
- 2005-6 8th International Triennial of Miniature Textile in Angers. ART SHIBORI "FORMES EN EXPANSION" 30 Mini Textiles Japanese in Angers. Anger *³, France
- 2006 The International Biennial Symposium Conference and Exhibition on Textile Art

“Scythia 6” Kherson, Ukraine.
2008 6th Busan International Environmental Art
Festival (INVITATION) . Busan, Korea.

この英訳を、正しく明瞭なものに修正するのは、さほど難しいことではありません。

SELECTED GROUP EXHIBITIONS

- 1992 Third International Textile Competition
The Museum of Kyoto
- 1994 *Textile Art Today*
The National Museum of Art, Osaka
- 2005 International Tapestry and Textile Arts
Triennial: *Fascinants. Textiles du Japon*
Tournai, Belgium (Invited Artist)
Kaunas Art Biennial Textile 05
Kaunas, Lithuania (Invited Artist)
- 2005-6 Eighth International Miniature Textile
Triennial: *Art Shibori, Formes en Expansion:
30 Mini-Textiles Japonais à Angers*
Angers, France
- 2006 *Scythia 6*, Sixth International Biennial of
Contemporary Textile Art
Kherson, Ukraine
- 2008 Sixth Busan International Environmental Art
Exhibition
Busan, Korea (Invited Artist)

大きな問題は「なぜこのままになっているのか。なぜ自分の作品を国外で発表する絶好の機会において『これでいい』とってしまうのか」という点です。その答えは三つあると考えます。

1 英語教育の義務化

義務教育に英語の授業があることで、日本人は「自分は英語を知っている」と思う傾向があるようです。ゆえに翻訳に際して、助けは必要ないと考えてしまうのでしょうか。

2 英語を国際コミュニケーションの行為として みなしていない

「英語」を加えることは国際化、グローバル化を意識した一種のポーズでしかなく見受けられます。たとえば、外国語の単語や名前の基本的なスペルミス (fascinants*¹, Tounai*², Anger*³) が、それを証明しています。つまり、「英語のような」ものがあればいいという考え方です。

3 英語を数億人が母国語として使っている「生きている」言葉とは見なさず、日本語バージョンが存在する万国共通のコードの一種として見ている。

おそらく今では少し時代遅れである、「日本のガラパゴス化」の概念の延長と言えるでしょう。

私はこれを経済的な問題だとは思いません。少なくとも英語がもっと出来る人に訊ねるか、代理店で5,000～10,000円を払えば解決できるのですから。

このレベルの間違いがいまだに頻繁に起こっていることは、悲惨ですらあります。

「工芸」という単語自体に関する争点についても後ほどお話いたしますが、まずはこの(ミス)コミュニケーションの形態をいくつか見てみましょう。

ときめき [Spark joy]

近藤麻理恵氏は、「こんまり」ブームを引き起こし、多大な影響力と成功を達成した、誰もが知っている日本と日本文化の代表者のひとりだと言えるでしょう。そして、「片付けの伝道師」の成功は、彼女の哲学が英語に翻訳し難く、非日本語話者には理解できない言葉と概念であることに起因するのではないのでしょうか。「こんまり」について書かれたあるサイトには、“Does ‘Spark Joy’ Mean The Same Thing In English And Japanese?” というタイトルのページがあります。このタイトル(近藤氏のものではなく、Netflix シリーズに夢中になった人が書いたものです)は、特に慣用的な表現とはいえない **spark joy** が実際の英語には存在しないことを示唆しています。英語を母語とする人たちに **spark joy** が何を意味するのかを「英語に翻訳し直さなければならない」のがその証拠です。これは、**spark joy** が、英語と日本語両方に翻訳できる、名もない第三言語の表現であるということを意味しています。

次の日本語と英語の定義に何か問題があるのでしょうか。

- ときめく

喜びや期待などで胸がときどきする。心が躍る。

- to beat fast (of one's heart) (鼓動が速くなる) ;
to flutter (with joy, anticipation, etc.) (心がはためく) ;
to throb (拍動する) ; to pound (激しく動悸する) ;
to palpitate (ドキドキする)

わざわざ **spark joy** を持ち出すまでもなく、従来の英語表現で特に問題ないと思われます。

spark joy は巧妙なマーケティングとは言えますが、誠実なコミュニケーションとは言えません。

もういくつか例を示します。

生きがい [いきがい / *Ikigai*]

Ikigai (生きがい) も翻訳できないとよく言われます。私の考えでは、「人生における価値と目的」「生きる価値を与えるもの」という古くから世界にある概念に十分重ね合わせられると思います。少なくとも、次の定義よりは良いのではないのでしょうか(最近出版された生きがいのカバーの広告から引用)。

It's the place where you needs, desires, ambitions, and satisfaction meet: a point of perfect balance, and perfect fulfilment.

*Ikigai*とは、個人のニーズ、欲求、野望、そして満足が出会う場所であり、つまり完璧なバランス、完璧な達成感のポイントである。

生きがいの定義は、もちろんそんなものではありません。少なくとも、この奇妙な定義がネット上で人気を集めるまではそうではなかったでしょう。しかし、もう誰にも止められません。

和牛 [わぎゅう / *Wagyū*]

次に、*Wagyū* (和牛) です。和牛が典型的な日本の「ブランド」として発信された直後、オーストラリアの農家は *Wagyū* と名付けた牛肉の販売を始めました。和牛が単に **Japanese beef** として宣伝されていたなら、このような事態を避けられたかもしれません。

和食 [わしょく / *Washoku*]

2013年、*Washoku* (和食、日本料理) がユネスコの無形文化遺産に認定されました。「和食」は、西洋料理に使われるようになった「洋食」という単語と同時に発明された、明治時代の造語ではないかと仮定しています。しかし、一旦ユネスコに認定され偶像化されると、和食はもはや日本食を意味するものではなく、特定の種類の日本食だけを意味するものであることがわかります。重要なのは、和食という正式名称ではなく、その名称が理解され、その後誤解されるということです。ネット上で次のような一文を見かけました。

Washoku is, at its heart, a simple preparation of rice and side dishes made with a variety of seasonal ingredients.

和食は、本質的に、さまざまな季節限定の食材で作られた、ご飯とおかずで構成された食事である

これを読んで、私は日本で食べてきた素晴らしい日本食の数々は「和食」ではなかったのか! と思いまし

た。例えば、とんかつは和食でしょうか? たとえ「和食」ではなくても、日本食であることには間違いのないでしょう。では、お好み焼きは? ポッキーは?

日本語の造語の性質から、「和食」という言葉は非日本語話者にとって奇妙な響きを持ちます。問題は、単語をひとたび孤立させ、フェチ化してしまうと、最近ではインターネットやグローバルメディアの力で、その言葉の使われ方についてこれまで以上に制御できなくなるということです。

和紙 [わし / *Washi*]

西洋の紙の愛好家は、個人のニーズに合わせて和紙を使用している、ほとんどが和紙 (Wa: 日本, shi: 紙) という単語を理解していません。たとえば、和紙には建築以外の用途が多いのに、「パーチメント (羊皮紙)」とされます。「パーチメント」とは本来、羊やヤギの皮から作られているにもかかわらず、植物素材の和紙を「手作りの建築用パーチメント」と定義しているアメリカの商用ウェブサイトが数多く存在するのです。

「和紙」は明治時代の造語の一つであり、それが意味するものが消えることを恐れた知識人が日常言語として取り入れたのが始まりとされています。その使用は20世紀を通じて着実に拡大し、1943年、民芸運動の主唱者である柳宗悦の次のような思想によりピークに達しました。

「なぜ今のやうな不幸な事情が醸されたのであろうか。和紙が衰へたからである」

日本国外では、1970年代頃から、言葉が文字通りの意味から切り離されたことが原因で、「**Japanese washi paper** のみを使用している」製品、直訳すると「日本 (Japanese) 日本 (wa) 紙 (shi) 紙 (paper) のみを使用している」製品などという面妖な表現が標準となってしまいました。

工芸 [こうげい / *Kōgei*]

工芸 工藝 こうげい コウゲイ
KOGEI kogeï kougei kōgei

それでは、*kōgei* (工芸) 自体について考えてみましょう。*kōgei* という単語の使用は、正統派的慣行の大きな一部となったため、公式英語ウェブサイトなどで **craft** という言葉を見つけるのは非常に困難になりました。たとえば、日本伝統工芸展は、“**Japanese Traditional Art Crafts Exhibition**”ではなく、“**Japan Traditional Kogeï Exhibition**”と翻訳されて

います。公式訳の明確化がない中、Japan Times などの海外向けの出版物は、“Japanese *kōgei* traditional crafts”などの不自然なフレーズを使用するほかありません。

私は *craft* から *kōgei* への専用単語の移行に関する公式の英語の説明がないか、一生懸命探し、次の文を見つけました。

Japan Today による.. “there are *kōgei* that are created by artists and those manufactured by artisans” (芸術家や職人によって作られた *kōgei*) ..日本の *kōgei* は、職人が製品としてつくるものと、芸術家が作品としてつくるものの二つの流れを併せ持つことで、独自のアイデンティティを確立しました。どちらの場合も、制作者は、さまざまな性質を最大限に活用するために、関連する素材と技術の本質を見極めようとしてきました。これは、制作者が素材(陶芸用の粘土や金工用の金属など)を自由に選ぶのではなく決まっていることと、芸術品や製品に関係なく、イメージやアイデアを考案する前に陶磁器、染織、漆器など、完成後のカテゴリーがあらかじめ決まっていることを意味します。したがって、日本の工芸の場合、イメージやアイデアを考案する際に制作者が扱う素材は、制作者によって選択されたものではなく、素材の性質を芸術品や製品に活用するプロセス専用のものであると言えます。

ではここで、これらの普遍化の例が、例えば英国やアメリカの工芸品に等しく適用されるかどうかを検討してみましょう。これは、前文の続きです。

このように素材との親密さが強化されたことで、最高の生産レベルが達成され、日本の工芸品の表現性が高度なものとなったのです。芸術家によって作られた作品を検討するとき、そのような作品が単に工芸の英訳として従来から使用されてきた用語である“crafts”として分類できるかどうか疑問になってきました。

確かに伝統や慣習になってきたのは、*crafts* を *kōgei* と訳することで、その逆ではありません。いずれにせよ、「『工芸』は『最高の技術』を示すので、*crafts* ではなく *kōgei* と呼ばれるべきである」ということが基本的な主張となっています。しかし、それは本当に分類的な違いと言えるのでしょうか。

世界中の人たちとのコミュニケーションという立ち位置から考えたとき、よく理解されている英語の単語を廃止し、登場するたびに説明が必要な別の単語に置き換えるのは、本当に賢明なアイデアなのでしょう。

美術史家の佐藤道信は、明治時代の「工芸」という言葉の使用について研究しており、当時は作品を「工芸品」と承認するのは農商省の責任であり、これらの工芸品は単に日本の輸出入を増やすための実用的な経済的ツールとして見られていた、と書いています。対照的に、美術 (*art, fine art*) は、工芸と比べてより高い次元のものだと捉えられており、承認は教育省が行っていました。そのため、最近の芸術界における「工芸派」の出現は、100年にわたる縄張り争いの次のステージだと考えられます。

しかし、ときめき、生きがい、和牛、和紙など、新しい単語、または再定義された単語は、啓発的な影響を及ぼす可能性がある一方で、混乱と誤解をまき散らす可能性もあります。*kōgei* という単語で意味を伝えられるのか、さらには興味、理解、また販売さえも促す役に立つのか、非常に疑わしくあります。

かつて V&A 博物館の研究責任者だったグレン・アダムソンは、この点を非常にうまく表現しています。

「ものづくりの世界は、使用する言葉によって異なって見える。これは必ずしも技術、材料、プロセスが異なるためではない。むしろ、この区別は社会的・政治的によるものなのだ」

しかし、今や *kōgei* という単語は、公式の思考、文書、ウェブサイトなどで広く普及しており、おそらく日本の *kōgei* が、ユネスコの無形文化遺産として公式に認められる日もそう遠くないでしょう。しかしこれは、結果として新しい扉を開くのではなく、閉めることになるのではないかと私は懸念しています。

第 2 章

工芸用語・英訳の基礎

産地の工芸品名の訳し方

ザ・クリエイション・オブ・ジャパンが2018年に発表した「工芸英訳ガイドライン」のなかで、未解決であったテーマを改めて考えました。

Q1 地域名 + 地域名+工芸品の種類 その場合どう訳す?

〈参考〉複数の英訳例

九谷焼 (くたにやき)	Kutaniyaki ceramics
	<i>Kutani-yaki ceramics</i>
	Kutani-yaki Porcelain
	Kutani Porcelain
	Kutani porcelain
	Kutani ware
	Kutani chinaware
	Kanazawa Kutani pottery
	Kutani ceramics
	Kutani Ceramics
	Kutani ware
	Kutani Ware
	Kutani-ware
	Kutani-Ware
Kutani ceramics	



A 地域名 + ware

例) Kutani ware (九谷焼), Arita ware (有田焼), Bizen ware (備前焼)

「Kutani ware です」

ware は小文字、ハイフンなしです

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「例外もありますが、基本〇〇wareでOK」

ヴィクトリア&アルバート博物館 (以下V&A博物館) の2015年の出版物では、美濃窯 (志野) は Mino kilns (Shino type)、有田窯 (伊万里) は Arita kilns (Imari type) と、括弧書きを入れるルールを採用しました。そして ware ではなく kilns を採用しました。しかし〇〇ware は一般的に使われていますし、間違いではありません

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「九谷焼 = Kutani ware」から、以下の英訳が可能となります

益子焼	Mashiko ware	京焼	Kyoto ware	小石原焼	Koishiwara ware
笠間焼	Kasama ware	越前焼	Echizen ware	小鹿田焼	Onta ware
美濃焼	Mino ware	丹波焼	Tamba ware	唐津焼	Karatsu ware
瀬戸焼	Seto ware	備前焼	Bizen ware	有田焼	Arita ware
常滑焼	Tokoname ware	萩焼	Hagi ware	薩摩焼	Satsuma ware
信楽焼	Shigaraki ware	砥部焼	Tobe ware	壺屋焼	Tsuboya ware

※P20参照

Q2 wareの使用範囲はどこまで?

A 料理を盛る器以外のものにも使用してよい

例) 花器、硯箱、造形作品、道具類(タイル、土管、便器など)

「使用できる」

“ware”は、料理を盛る器以外のものにも使用できます

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

Q3 やきもの以外の工芸品について地域名を一緒に表したい場合、ルールとして「地名 + 素材 + ware」でよいか?

例) 漆	Kutani lacquerware	} よいでしょうか?
金工	Kutani metalware	
ガラス	Kutani glassware	
竹	Kutani bamboware	
木工	Kutani woodware	

A 一概には言えない

「一概には言えません」

輪島塗の場合はwareを使います。Wajima lacquerもしくはWajima lacquer ware、Wajima lacquerware

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「素材によって表記は変わります」

“ware”を使わないものがあります

金工 = metalwork

ガラス = glass

竹 = bamboo work

籠 = basketry (ただし竹籠ではない)

木工 = woodwork

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

陶器以外の素材にwareがつくmetalwareやglasswareなどの言葉もありますが、範囲や使い方が陶器の場合とは少し異なります。なお、metalwareは食事や調理に関わる一部のものを指す語です

basketryは、藤細工のイメージが強いです

南部鉄器をNambu ironworkと呼ぶかどうかには疑問があります。ironworkは彫像や工業物のイメージがあるため、技法や製造を語る場合はironworkがよいでしょうが、代表的な完成品が生活道具を指している場合、Nambu ironwareのほうが英語らしい表現です

^{ついき}槌起銅器は、beaten copperwareやraised copperwareとも呼びますが、観光分野など一般向けにはhand-hammered copperwareがよりわかりやすいと思います

[Zackary Kaplan | 翻訳者]

Q4 「輪島塗」「山中漆器」「鎌倉彫」

同じ漆器でも日本語の名称が地域によって異なるものがある。
その違いをそのまま英訳すべきか?

例) 輪島塗	Wajima-nuri	Wajima lacquerware
山中漆器	Yamanaka shikki	lacquerware
鎌倉彫	Kamakura-bori	

A 意味が伝わることが重要

「lacquer、lacquer ware、lacquerwareの前に地名を入れる」

Wajima lacquerもしくはWajima lacquer ware、Wajima lacquerware。ただし、鎌倉彫は鎌倉地域特有の彫りという意味でKamakura-style carvingです

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「shikki lacquerwareは同義語の繰り返しになるのでshikkiは不要。

最近ではurushiと書くことが増えている」

日本では「漆」をlacquerではなくurushiと表記すべきである、という意見が増えています。V&A博物館でも、日本の漆について話すときはいつでもurushiと表記するよう心がけています

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「urushiだけでは一般人には意味が伝わりません」

どうしてもurushiという表記を使いたい場合、urushi lacquerのように、セットで紹介するとより伝わりやすいでしょう。ただし、一般的にはlacquerやlacquerwareのほうが広く理解されやすいです。

[Zackary Kaplan | 翻訳者]

Q5 旧国名と工芸品の組み合わせ表記は「地名 + 技法」でよいか？

例) 加賀友禅 Kaga Yuzen
 金沢箔 Kanazawa kinpaku

A イタリック表記の際に注意が必要

「ローマ字表記+イタリックを使うこともあります」

Yūzen (友禅) は、Miyazaki Yūzen (宮崎友禅、1654-1736) の人名に由来しているので、大文字のYとローマ字表記の使用は正しいです。しかしV&A博物館では、テキストスタイルについて書くときは、例えば
'Plain weave ramie (*asa*) with freehand paste-resist dyeing (*yūzen*), stencilled imitation tie-dyeing (*suri-hitta*) and embroidery in silks and metallic threads'

asa (麻)、*yūzen* (友禅)、*suri-hitta* (摺疋田) というように、小文字とイタリックを使用しています

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「名前の成り立ちをよく見る必要があります」

Kaga-Yūzen silk dyeing

「加賀」も「友禅」も、固有名詞なのでイタリック体にはしません

Kanazawa gold leaf

金沢箔は「from (地名)」のようにfromを用いる必要はありません

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

技法名の友禅は、一般名詞として扱う例も少なくありません

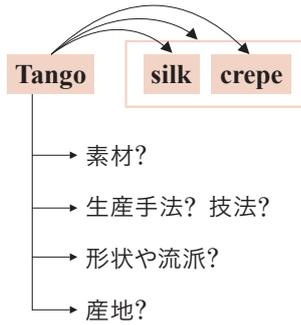
地名や人名に由来するものであっても、本来の意味から離れてきた言葉に関しては一般名詞(頭文字小文字表記)でもよいでしょう。

→「加賀」は歴史的な文化圏を指しているのものでそのまま大文字表記ですが、友禅に関しては、わかりやすさを重視して、もう少し緩く考えてもよいはず。友禅の場合、母語話者でも、「友禅の由来が宮崎友禅であること」を見落としてしまう人が多いと思われます。染織技術の文脈において、一般名詞として扱うのも可でしょう

[Zackary Kaplan | 翻訳者]

Q6 旧国名や旧地域名が名称になったものをどう伝えるか?

丹後ちりめんの「Tango」とは何?



英語圏の方が、たとえば「Tango」という日本語の音訳を耳にしたり、目に触れたりした際にその言葉を理解しようとして、頭の中では左のようなことになっています。

何も知らない人にとってTangoは、素材名なのか、技の名称なのか、土地の名前なのか、それがどこにかかる言葉なのかも不明です。

「丹後ちりめん」を初見の英語話者には、どのような表現がより正確に伝わるでしょうか?

A 紹介文がなければ、現代の地域名に直す

産地ならば、現代の地理(京都)を用いる → Kyoto silk crepe

その上で別名(丹後)を紹介 → 用語解説

海外の人は旧国名や旧地域名を知らないので、紹介文がなければ、現代の地域名に直すのが翻訳の基本です。

旧国名(藩名・地域名)を音訳して使いたい場合は、「用語解説」の作業が必要になります。

効果的な用語解説は下記三つの要素を含みます。

- 1) 現代の地域名
- 2) いつの時代の呼び名という情報
- 3) なぜその呼び名に今でもこだわるかというストーリー

意味の紹介をまず優先してから、日本語でどう呼ばれているかを示します。

例) 用語解説なしの場合:

丹後ちりめん	Kyoto silk crepe
加賀象嵌	Kanazawa metal inlay
京象嵌	Kyoto metal inlay
肥後象嵌	Kumamoto metal inlay

用語解説ありの場合:

丹後ちりめん	Tango silk crepe でも可
加賀象嵌	Kaga metal inlay でも可
京象嵌	Kyoto metal inlay ※Kyo metal inlay = ×
肥後象嵌	Higo metal inlay でも可

文章の場合は、日本語名称をついでに紹介してもOK

例) Kyoto silk crepe (known as "tango chirimen" in Japanese)

typeとstyleの考え方

「柿右衛門」は、ヨーロッパでもよく知られた名称ですが、つくり手としての柿右衛門、その柿右衛門のつくった器、さらにはデザインの一様式としての柿右衛門を、日本語ではすべて「柿右衛門」と言ってきました。そのことが英訳を複雑にしています。

Q 「柿右衛門」の訳は多すぎる?

〈参考〉美術館・博物館の英訳例

柿右衛門 (かきえもん)	Arita, Kakiemon Style
	Arita kilns (Kakiemon type)
	porcelain, Kakiemon style ware
	Kakiemon Style, Arita Ware
	Kakiemon Style, Hizen Ware
	Kakiemon kiln
	Kakiemon-style
	Hizen ware, Arita Kakiemon type
	Arita/Hizen ware, Kakiemon style
	Imari Ware, Kakiemon Type
	Kakiemon type
	Kakiemon type, Imari Ware
	Kakiemon porcelain
	Kakiemon ware



色絵花卉文輪花鉢
柿右衛門様式 有田

▶ 日本国内で使われている呼称からしてバラバラなので、英訳もバラバラになってしまっています

例) 柿右衛門
伊万里 (柿右衛門様式)
柿右衛門 有田
柿右衛門様式 有田

A 本来の意味に忠実に

「そもそも、どの作品が [柿右衛門] [柿右衛門窯] [柿右衛門様式] なのかがまだ曖昧」

柿右衛門窯や柿右衛門の写しなど、さまざまなものがあり、また区別も付いていないので、日本語も英語もバラバラになってしまう背景があります

[西田宏子 | 根津美術館顧問]

「様式には type、写しは style を」

Arita ware, Kakiemon type もしくは、最近、V&A 博物館では、Arita kilns (Kakiemon type) を使用しています。日本の柿右衛門に対しては type という語を使うのがよいでしょう。type は日本語では「様式」にあたり、「模倣」ではなく、むしろ「類型」を示します。style が写しや模倣を意味するからでしょう。

そういう意味でも、ヨーロッパのやぎものの「柿右衛門写し」に対して style を使うのは間違いではありません

「意匠に言及するときに type をつかう」

織部焼について明確にしたい場合は、Mino ware (美濃焼) あるいは Mino kilns (美濃窯) と言い、その意匠に言及するときに Oribe type (織部様式) と言うのではないのでしょうか

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「KakiemonはKakiemonのまま」

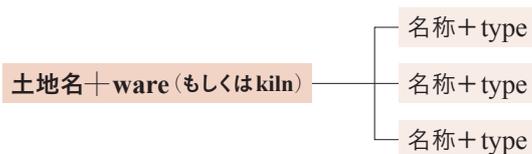
意味が複雑すぎるので、KakiemonはKakiemonのまま表記し、その解説は解説として、別のサブ的なものでフォローするのがよいでしょう

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

釉薬や意匠の分類

産地や名が由来でない名称を「志野= Shino type」「柿右衛門= Kakiemon type」のようにtypeで表すものとして、以下が挙げられる

黄瀬戸	Kiseto type
瀬戸黒	Setoguro type
志野	Shino type
織部	Oribe type
黒織部	Kuro Oribe type
美濃伊賀	Mino Iga type
祥瑞	Shonzui type
御本	Gohon type
朝鮮唐津	Chōsen Karatsu type
斑唐津	Madara Karatsu type
絵唐津	Egaratsu type



デザインや技法の違いによって見た目が変わり、名称が付けられたもの

例)



日本語と海外で その意味が異なって使われている言葉

Q1 陶器はceramicか、stonewareか?

英国のV&A博物館と大英博物館では、「素材(material)」表記として陶器をstonewareと記してあります。また、米国では、カオリン分の少ないもの(stoneware)と多いもの(porcelain)で分けている美術館があります。

▶ 陶器 = stoneware ?

「stonewareは^{せっき}炆器」

日本…備前焼、越前焼はstonewareですが、乾山や仁清、古清水はstonewareではありません。stonewareはとても硬く焼き締まったドイツ炆器が由来です。乾山や仁清、古清水などの陶器は硬く焼き締まっていません。柔らかい胎土を京都の小さな窯でつくったものであり、stonewareとは別のもと考えます
アメリカ…伊万里は磁器ではなく陶器とされています。なぜならカオリンが少ないからです

[西田宏子 | 根津美術館顧問]

「stonewareが普及」

英国…stonewareは標準的な陶磁器用語です。ガラス化していないearthenware、ガラス化したstoneware、ガラス化して多くのカオリンを含むporcelain(磁器)という言葉で分類します。ですからstonewareは京焼にも使用してよいと思います

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

Classification of Ceramics

group		土器	陶器	炆器	磁器
group		earthenware	stoneware (<i>tōki</i>)	stoneware (<i>sekki</i>)	porcelain
condition	raw material	colored clay	colored clay	colored clay	white clay + silica + felspar, kaolin
	glaze	unglazed	glazed	unglazed or glazed	glazed
	firing				
	temperature	about 800°C	1000-1300°C	1200-1300°C	1300-1400°C
description	color of body	colored	colored	colored	white
	translucency of body	opaque	opaque	opaque	translucent
	porosity of body	porous	porous	non-porous	non-porous
	sound when tapped	dull	dull	clear high	clear and metallic
example		Jomon earthenware Yayoi earthenware	Karatsu ware Satsuma ware	Sueki ceramics Bizen ware	Arita ware Hasami ware

カタログ『Earth and Fire』(佐賀県立九州陶磁文化館、2019年)より

A

ceramic = やきもの、陶磁器 (土を焼いたもの)

ceramics = 陶磁器・やきものの集合体

earthenware = 土器

stoneware = 陶器、炆器

porcelain = 磁器

Q2 Rakuと日本語の「楽」との違いとは？

A 日本において、「楽焼」という言葉は1000°C以下の低火度で焼かれたやきものや、楽家で作られた茶碗を指すのが一般的。しかし北米ではRaku wareは磁器以外のすべての土器、陶器、炆器と認識されることもある

▶ Raku wareと英訳しても、日本で認識されている「楽焼」とは必ずしも一致しません

「Rakuが何を示すのか、非常に難しいです」

Rakuは、日本の狭義では「楽家」で作られたやきもので、技術的には「軟質施釉陶」です。

しかし「楽家」以前にも、大坂城周辺で似たやきものが焼かれていました

[西田宏子 | 根津美術館顧問]

「赤楽と黒楽でも違います」

黒楽は高火度焼成の earthenware、赤楽は earthenware。「楽家」では、1250°Cで焼いていますが、焼成時間が30分と短いため、粘土がガラス化していません。赤楽は earthenware (土器)、黒楽は high-fired earthenware (高火度焼成土器)と呼ぶべきでしょう

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「stonewareではなくRaku-style pottery」

Raku (楽) は stoneware (炆器) ではありません (あまりにも低火度焼成です)。

Raku-style pottery だと思います (イタリックは使わず、人名に由来するのでRは大文字です)

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「検索に漏れないデータの作成が必要です」

楽焼は、素材としてであれば earthenware ではないでしょうか。そうすれば、earthenware を入力して博物館の所蔵作品を横断検索すれば、「楽焼」を見つけられます。検索条件に「日本」、そして「楽家」の名前を入れれば、歴代の作った作品を見つけることができます

「定義しすぎず、簡潔に記すことが大切です」

全てを注意深く定義しようとする、もし後で「写し」であることが判明した場合、矛盾が生じる恐れが出てきて、後で情報が追加できなくなってしまいます。一般の人たちにとってわかりやすいように、簡潔に書くことが大切です

[Tanya Szrajber | 大英博物館 データベースおよび単語の記録保存部門の前責任者]

Q3 kimonos 着物は複数形？

▶ 「着物」はカテゴリ全体を指す言葉なのに、kimonosという表記が多く見られます

A 「sはつけずに、単数扱い」

文学の世界では着物にsをつけるのは、とても不自然に思われます。ある作品やまとまった作品を説明する際には“some kimono are...”や「三着のkimono」などというように書きます

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「概念を述べる場合もsはつけずに複数扱い」

kimonos は一般的に使われていますが、間違いです。

概念を述べる場合は、“kimono are a type of (着物はこのような種類の...)”となります

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「manga (漫画) の場合もsはつけずに、単数扱い、複数扱いに」

工芸品ではありませんが、大英博物館では manga (漫画) もsをつけず、単数でも複数でも扱われます。つまりsなしで、manga are ~とします。漫画が概念のときはmanga isであり、実際につけられた複数の作品に対してはmanga areとなります

[Simon Wright | ジャパン・ハウス ロンドン企画局長]

外来語の名詞は、複数形・単数形を兼ねています (活用する場合は元の言語の活用法に従う。日本語の場合は無関係)

[Zackary Kaplan | 翻訳者]

工芸英訳のための共通ルールづくりに向けて

第1章-3および第2章は、2019年にロンドンジャパンハウスで開催されたシンポジウムをまとめたものです。以下はそのオリジナルのダイジェスト版です。

地域名+ ware について

(▶ p.14)

Simon Wright (サイモン・ライト): では次の質問、工芸品の名称についてです。地域の名前のあとに **ware** がつきます。

Kutani ware (九谷焼)

Arita ware (有田焼)

Bizen ware (備前焼)

ぜひこれについて、ご教唆をいただきたいです。

西田宏子: **Kutani ware** は大丈夫だと思いますが、最近の作品では、九谷焼が実際に九谷で作られているとは限らないため、**Kutani ware** を使うのは非常に混乱すると思います。現代のものなら **Kutani ware** と言ってもいいのですが、古九谷と呼ばれる江戸時代のものには使えません。それらは、**Arita ware** または、**Kutani style** などであり、日本語でもどう表現したらいいのか難しいところです。

Rupert Faulkner (ルパート・フォークナー): 最近までは、備前焼と呼ばれるもののほとんどが備前という一つの地域で生産されていたと思います。ですから、備前焼 (**Bizen ware**) という言葉を使うのは不都合ではないと思いますが、伊部 (**Inbe**) という、より限定された地域の名前も時々使われます。伊部は駅の名前であり、これもまた混乱を招く要因となるでしょう。

ware という語は普通に受け入れられています。私たちが開催した3年前のギャラリー展示では、混乱を避けるため **ware** を使わずに、窯 (**kilns**) や有田窯 (**Arita kilns**) という言葉を使いました。

ルパート・フォークナー: 現代の日本では、たとえば益子のような場所では、ほぼすべての様式・技法が作られています。私たちがとある場所特有の技の歴史ある **ware** だと思っていたものが、今では日本のあらゆる場所で、さらに国外でも職人により再現されています。では、ほかの土地で作られた備前様式や備前スタイルを指す言葉として、どう言えばいいのでしょうか？

たとえば、水指 (**freshwater jar**) です。鈴木藏の美濃焼 (**Mino ware**) は、鉄釉 (**iron slip**) の上に志野の種類 (**Shino type**) の釉薬で耐性をつけていますから、**freshwater jar**, **Mino ware**, **Shino type** となります。

ware の使用範囲はどこまで?

(▶ p.15)

サイモン・ライト: **ware** は、飲食に使用されないアイテ

ムを表現するのにも有効ですか？

ルパート・フォークナー / Joe Earle (ジョー・アール): やきもの (**ceramics**) であれば使えます。

やきもの以外の工芸品で地域名を一緒に表す場合

(▶ p.15)

サイモン・ライト:

九谷漆器 (**Kutani lacquerware**)

九谷金工 (**Kutani metalware**)

九谷ガラス (**Kutani glassware**)

九谷竹細工 (**Kutani bambooware**)

九谷木工 (**Kutani woodware**)

となりますか？

ルパート・フォークナー: 実際には、もっと伝わりやすい表現があるのではないのでしょうか。

漆器 (**Lacquerware**) は大丈夫です。

金工 (**metal**) は **metalware** ではなくて **metalwork**、木工も **ware** を使わずに **woodwork**...

ルパート・フォークナー: ガラスはただ **glass** とするのがいいと思います。竹の場合ですが、竹細工 (**bamboo work**) は聞いたことがあるでしょう。編まれているものなら、カゴになります。

Tanya Szrajber (ターニャ・シュライバー): なぜ **bamboo pot** や **mat** といわず、**ware** と言う必要があるのでしょうか? **ware** が濫用されることに疑問を感じます。

Kutani ware = 「九谷で作られている」というだけでは、様式や種類がわかりません。これでは、あまりにもざっくりしすぎています。

サイモン・ライト: つまり、**ware** という語は使わないほうがいいということでしょうか。

ルパート・フォークナー: **lacquer ware** とスペースを入れずに **lacquerware**、つまりひとつの単語であるべきだと思います。

サイモン・ライト: 私たちが美術館で木工のを展示する場合は、**wood work** としています。

ジョー・アール: **Kutani lacquer** (九谷漆器) は OK に聞こえます。**Kutani metal** (九谷金属器) は、その後ろに何か別の語が来るように思えます。**Kutani glass** (九谷ガラス) は OK でしょう。**Kutani bamboo** (九谷竹器) は何か追加が必要でしょう。**Kutani wood** (九

谷木器)は、とてもおかしく聞こえます。おそらく、**Kutani woodwork** と言うべきでしょうが、微妙に違う気がします。

できれば、ネイティブの方に尋ねてください。私はそれがベストだと思います。

**同じ漆器でも、
産地によって日本語の名称が異なる場合** (▶ p.15)

輪島塗 **Wajima-nuri / Wajima lacquerware**
山中漆器 **Yamanaka shikki lacquerware**
鎌倉彫 **Kamakura-bori**

漆 (lacquer) の例ですが、産地によって名称が異なります。日本国内の同じものに対してでさえ、違った単語が使われているのです。そもそも日本語自体が異なるせいで、英語に翻訳するとすべて違った英語になります。

私自身は、異なった用語に対して標準化した訳語を策定すべきだと思いますが、現状の翻訳例は完全にバラバラです。

ジョー・アール: 最初の二つは同じ用語に対する地域の違いなので統一する必要がありますが、三つ目の **bori** は、**lacquer** (漆) の「用途」ではなく、彫刻つまり「技法」を意味しています。ですから、これらに関しては違う訳語でいいでしょう。**carving** (彫刻) と呼ぶことができます。

旧国名と工芸品の組み合わせ表記 (▶ p.16)

技術と生産地域が一緒になっている時には、どのように翻訳するのでしょうか?

一つの地域を象徴する単語や技術が、そこは違った場所で生産されている場合に、どのように翻訳すべきかということです。

ジョー・アール: 加賀友禅について考えると、これは金沢地方でつくられた染物である友禅を表わす、比較的現代的な用語です。友禅は京都を起源とした17世紀末頃からの技術ですが、現代日本では、どこでも作られています。日本の他の地域で作られた友禅には、それらが由来する地域の名前が前に付くわけではありません。しかし石川県では、特定のタイプの友禅としてブランド化し、加賀友禅として成功しています。

ルパート・フォークナー: 加賀友禅というと、石川県固有の友禅に聞こえます。京友禅は京都限定とは思わないのですが。

ターニャ・シュライバー: 地名を冠した工芸品の場合、産地の混同を招くことが懸念されます。ある特定の地

域に由来したり、それに特化した技術であることを正確に伝えられるのでしょうか。

Yuzen というだけでは不十分なのですか? 私には「友禅」と「加賀友禅」の違いがわかりません。「友禅」というのは様式ですが、同時に特定の技法を指すものです。様式であることだけを指すのなら、技法には言及せずに、つくられている場所と様式を表せばよいでしょう。

ジョー・アール: はっきりさせておかなければならないのは、私たちがここで英訳のための俎上に上げているのが、とてもシンプルなラベルのための表記なのか、解説や説明のためのものなのかです。一般の鑑賞者に伝えることを想定したとき、たとえば、英語が第二言語であるフィリピンから来た人が、加賀友禅 (**Kaga Yuzen**) という表記を見ても、なんのことやらわげかわからないでしょう。

伝えなければ、訳語は明確であると同時に解説 (=そこにあるものが何であるかがわかる) でなければならぬと常に心得ておく必要があります。

サイモン・ライト: 加賀友禅ではなく友禅にするのがいいと思います。

ルパート・フォークナー: 「加賀」はサブの説明として使用するといいです。

「卯花塙」をどう訳すか (▶ p.6)

国宝の茶碗「卯花塙」は、日本のお茶碗の象徴ともいえます。海外でも展示される機会がありますが、海外はおろか日本の展示でも、英語表記がそのたびに異なっています。

西田宏子: 一番よい方法は「卯花塙」という銘の読み方を音で示す以外何も訳さないことです。

「卯花塙」の意味が、卯の花の垣根だとすぐにわかる日本人は多くないでしょう。日本語でさえその名前の意味を説明するのは難しいのです。ですから、必ずしも翻訳する必要はないと思います。それよりも重要なのは、どの窯で、いつつくられたか、そして歴史的に誰が所有していたのかということです。多くの重要な詳細が作品の背後にあるのですから、それらは卯花塙という名前がどういったものかと説明するよりも、はるかに重要な事項です。

ジョー・アール: なぜ「卯花塙」という銘がつけられたかということを中心にして、25語から50語で説明するのによいと思いますが。

西田宏子: おそらくそれでよいと思います。

ターニャ・シュライバー: その名前というのはこの二つとな

い作品につけられているのですよね？ 単純に **Shino type tea bowl known as 'Unohanagaki'** というキャプションを読むと、志野様式が（卯花壺として）知られているかのように読めますが、これは全く間違っているのですよね。

西田宏子：間違っています。これは志野様式的美濃焼です。

ターニャ・シュライバー：「Shino type tea bowl known as …」として知られている志野様式の茶碗」という箇所に曖昧さがあります。なぜなら、全ての志野茶碗が日本語で卯花壺と呼ばれているように解釈できるからです。実際にはそうではなく、唯一無二の国宝の茶碗がそう呼ばれているわけですから、この英訳タイトルは、一般の鑑賞者をミスリードするのではないのでしょうか。何故この作品が作られ、何がこの作品を格別なものとし、「卯花壺」という名前が指すのがどんな花や木なのか、こういったことは全て解説の役割です。

ルパート・フォークナー：ターニャさんは、名前（銘）は後に来るべきとおっしゃったと思います。茶碗というのが最も重要な事柄で、次に名前（銘）、美濃焼、志野様式という順番です。「卯花壺」が斜体で書かれていてもいいでしょう。余計な説明を入れないほうが題名が見栄えいいですし、解説のところでふくらませればいいのです。

会場参加者：「卯花壺」は花咲く垣根に由来する銘だと思っていました。この場合、花はさほど関係なく、茶碗に描かれた垣根のことだと見ていたのですが。銘と題について明確にすることは大変重要だと思います。この場合の銘は、日本の茶の湯のためにつけられていて、単なる作品タイトルとは全く異なる意味を持ちます。銘は特別に名付けられたということがわかるようにすべきだと思います。それは単なる題ではないと考えています。

ルパート・フォークナー：このような詩的で想像力を刺激する茶道具に与えられる題というのは翻訳が大変難しく、長い文を書きでもしなければほぼ不可能です。銘を説明するための訳を、文中ですぐにつけたほうがよいでしょうか。それとも後の方にしたほうがよいのでしょうか。

ターニャ・シュライバー：作品の題や名前は、必ずしも作家がつけたものとは限りません。しかし、私には名前が作品に大変固有なものであると感じています。なぜ作品がその名前を得て、あるいはどのようにその名前とからみあっているのかといったように、それぞれの作

品に異なる歴史があるのです。それこそがその作品を興味深いものにしています。

サイモン・ライト：日本語では作品に与えられた名前をあらわすのに（銘という）特定の語を使っています。一方で我々は題という語を使っています。作品につけられた銘や題を翻訳するのは必要でしょうか。名前として扱ってよいのでしょうか。

ジョー・アール：銘をつけるという問題は素晴らしい論題となるでしょう。いわゆる「伝来」というのは、作品の所有にかかわる全ての異なる段階を意味し、その段階を経て作品が受け継がれてきたという認識です。銘をつけるというのはその一部であり、大変興味深いものです。

柿右衛門について

▶ p.18

柿右衛門も卯花壺と同様に、たくさんの訳語がありますが、**Kakiemon style** という言葉を使った際に知り合いから「その表現だと偽物のように見える」と言われて困りました。なぜなら、彼にとっては柿右衛門は「The 柿右衛門」であって「柿右衛門 style」ではない。どれが正解なのでしょう。

西田宏子：柿右衛門にはさまざまな特徴がありますが、難しいことには、日本人は柿右衛門様式の作品のことを大正時代、1912年まで知らなかったのです。日本人収集家が英国を訪れ、たくさんの素晴らしい柿右衛門様式を目にし、驚き、骨董商で1,2点買って日本に持ち帰ったのが最初なのです。

1970年代以降、有田、伊万里磁器のよい作品が日本に里帰りしました。柿右衛門窯は発掘され、たくさんのよい製品が見つかりました。しかし、柿右衛門とはいえない作品も70年代から80年代に大量に輸出されました。柿右衛門窯の近くの窯は廉価な作品を柿右衛門として作り始め、似たような種類、似た質の作品が同時に輸出されました。そのため、当時のものを本当の柿右衛門かどうか区別できないのです。

日本では、柿右衛門窯でつくられたものしか含まれていなかったと言わなければなりません。柿右衛門の窯の外にある窯のものは含みませんが、17世紀の有田で作られた、偽の柿右衛門が多くあります。ですから、**Kakiemon ware** は、柿右衛門窯のもののみと言いますが、たくさんの柿右衛門様式の作品が存在しています。

ルパート・フォークナー：そうですね。style という考え方が写しや模倣を意味するのでしょうか。ヨーロッパ版の柿右衛門に対して style というのはわかります。しかし、日本のものにたいしては、おそらく type とい

う語を使うのがおそらくよいのではないのでしょうか。日本語では様式です。type は模倣を意味するのではなく、むしろ類型を示します。

西田宏子：柿右衛門窯の近くの窯は模倣していたわけではなく、彼らの柿右衛門様式を作ったと考えています。オランダ商人たちからみればそれは同じものだったと思います。同じように見えたのです。

ルパート・フォークナー：おもしろいことに、西洋において柿右衛門は、日本での意味とはほとんど関係なく、一種のブランドとして独自の存在を確立しているという点を看過できないでしょう。しかしオークションではそのブランドは Kakiemon と略されることがありますが、Kakiemon ware は、一般的に白いものを指し、釉薬の下に青があるかないか、どこで作られたかなどに関わらず、カラフルな装飾があるものを指します。したがって、西洋での意味と日本での意味は違うようです。

ジョー・アール：オークション会社の見方からすれば、大変おもしろいことが起こりました。柿右衛門という言葉は日本の外で独自の命を吹き込まれたのです。海外では柿右衛門に少しでも似て見える磁器のことを言うようになりました。これは17世紀後半、1750年くらいまでに起きたことで、白くて上絵があるものを指します。おそらく染付も含むでしょう。柿右衛門という言葉はこのような意味でオークション目録に使われているのです。20世紀の後半から現在にいたるまで、ずっとそうであったと確信しています。

柿右衛門という言葉はほとんどブランドのようなものです。西洋では、何をもって「柿右衛門」と呼ぶかについては意見の不一致があり、厄介なものとなっています。

stoneware について ▶ p.20

すでに一般的に普及してしまった翻訳についての問題です。例えば、ヴィクトリア・アルバート美術館と大英博物館では陶器を stoneware と言っています。北米では磁器以外全てのやきものを「楽」といっています。すでに一般的になってしまったこのように翻訳された言葉を変える方法はあるのでしょうか。

ルパート・フォークナー：stoneware がドイツ炆器を指すとおっしゃるのはわかりますが、実際のところ、stoneware は標準的な陶磁器用語です。つまり、ガラス化していない（焼きしまっていない）earthenware、ガラス化した（焼きしまった）stoneware、ガラス化し多くのカオリンを含む porcelain（磁器）という言葉があります。

ですから京焼のことを stoneware と呼ばないのは受け

入れがたいのです。時々 earthenware なのか stoneware なのかどちらか分かりづらいときはありますけれど。

西田宏子：それは stoneware であり、earthenware とは少し違うと思います。

そしてアメリカの基準では伊万里は磁器ではなく陶器とされています。なぜならカオリンが入っていないからです。

ルパート・フォークナー：英国で porcelain として使われているものが stoneware となっている。紛らわしいのは stoneware という言葉です。しかし、日本では、土器、陶器、陶磁器、炆器、そして磁器、楽があり、釉薬がかかったりかからなかったりさまざまです。

西田宏子：乾山や仁清の作品に対して stoneware を使うのは遺憾です。stoneware というのはとても硬くてとても大胆に作られたドイツ炆器のことです。乾山や仁清の陶器は、とても柔らかい胎土を京都の小さな窯で低火度焼成してつくったものです。stoneware とは別のものと考えています。備前焼はよろしいでしょう、stoneware です。越前焼も stoneware です。しかし、乾山、仁清、古清水といったものは stoneware と呼ぶのには無理があります。

ターニャ・シュライバー：楽焼は今や一般的な用語となっています。器（ware）と素材の違いをつける場合、楽焼はある器を指しますが、素材としてであれば、earthenware となるのではないのでしょうか。

もし earthenware を入力して博物館の所蔵作品を横断検索すれば、楽焼を見つけられます。検索条件に日本、そして楽家の名前を入れれば、その家の一員が作った作品を見つけて、詳細な情報にたどり着くことができます。しかし、柿右衛門もそうだと思いますが、全てを厳密に定義しようとしてしまうと、逆に探しにくくなります。

「楽」 について ▶ p.21

西田宏子：楽焼というのは、日本では楽家によるもののみ厳密に使うのです。そのため、楽家の焼いたもの以外を呼ぶために、「軟質施釉陶」というとても複雑な名称をつくり出しました。

ジョー・アール：楽焼は大変広く伝わって、素人のアメリカ工芸の一部になっています。それは楽焼ではなく「ラク」なのです。それは全く違うものです。

ルパート・フォークナー：つまり、「楽」はもともと、16世紀末から陶器の茶碗（earthenware tea bowls）を作った一族の名前でしたが、今や世界的な用語となって

います。Raku ware と呼ばれるものに共通するものは、ある温度になったら窯から引き出して釉薬をかけ、急速に外で冷ましたものです。これがとても一般的になった理由は、この技術が比較的簡単だからではないでしょうか。

ルパート・フォークナー：黒楽は1200度を超える stoneware の焼成温度で焼いています。窯に長時間入れておくと、stoneware になるのです。黒楽の場合は焼成が30分と短いので、焼き締まっていません。だから黒楽は high-fired earthenware と言うべきです。

複数形 (kimonos) の翻訳

(▶ p.21)

日本語の単語の複数形はどう翻訳すればよいでしょうか。この例について私は「Manga 展」の内覧会で気付きました。大英博物館では漫画という単語を複数形化していません。これは通例なのでしょうか。

坂井：着物は概念です。Kimonos と複数形にするのは大変違和感を感じます。類型なのです。

ジョー・アール：文学の世界では着物を単数形にするのはとても不自然に思われます。

ルパート・フォークナー：Kimonos はかなり一般的に使われていますね。

ルパート・フォークナー：概念としての着物を言う場合は、“Kimono are a type of” (着物はこのような種類の…) というように表現します。

サイモン・ライト：大英博物館での manga の使われかたがわかり興味深かったです。manga は単数でも複数でも使われます。つまり、s なしで、manga are ~、といった具合です。漫画が概念のときは manga is であり、実際につけられた複数の作品に対しては manga are となります。